

松本武雄学長喜寿記念号に寄せて

大澤 一雄

横浜商科大学長松本武雄先生は昭和五十五年十一月十二日、めでたく喜寿を迎えられたが、今なお、矍鑠として大学の教育と経営に壮者を凌ぐ活動が続けておられる。

本紀要の記念号は、このような先生の高寿と御活躍を頌せんがために、本学に籍をおく専任教員によって發起され、執筆され、編集されたものである。

先生は明治三十六年十一月十二日、現在は岡山市に編入されている上道郡浮田村で生れた。この年は日露戦争の前年に当り、先生御誕生の日から約三カ月の後の明治三十七年二月十日には、日本がロシアに対して宣戦布告を行なっている。まさに、若い国日本が国運を賭して国際場裡に登場せんとする、新興の意気壮んなる時代に生をうけられたわけであり、このことは幾多の困難を克服しつつ初志を貫徹された、先生の人となりにも大き

な影響を与えたことと思われる。

大正十年、先生は岡山県立高松農学校の農科を卒業されてから四年間、県内の小学校の訓導として、また、実業補習学校助教諭として郷里の子弟の教育に当られたが、大正十四年、青雲の志止みがたく上京を決意、同年三月、横浜市役所に職をえられ、翌年四月、日本大学法文学部大学予科に入学されたのである。昼は役所で勤務し、夜は学校で講筵につらなるという苦学生生活に入られたのであるが、二兎を逐うことの困難を感じられた先生は、間もなく昼間部に転科、法律学の研究に専念され、昭和二年に予科を、同五年には法文学部法律学科をそれぞれ卒業された。

その間に、絹江夫人と結婚され、二児をもうけられている。

大学御卒業後、日本大学第三普通部、さらに神奈川県庁へと職をかえられたが、やがて生起した昭和十二年の日中戦争、昭和十四年のヒトラーのポーランド侵攻に端を発する第二次世界大戦の勃発という事態は、国際間の緊張をつよめ、日本の国際的地位を悪化させるとともに、さなきだに資源の乏しい日本の経済事情をきわめて窮迫せしめた。

この時期、県庁経済部商工課において経済統制の衝に当っておられた先生は、国家の困

難をよそに、場当りの施策で責任を回避したり、利己的な思惑にはしって恥ずることのない人々の現実の姿に次第に幻滅を感じられ、これらの問題を根本的に改革するには教育を措いて他にはない、という信念を強くされていったようである。郷里岡山において教鞭をとられた時代の御経験が脳裡に去来したことであろう。先生のお考えが現実のものとなり、横浜第一商業学校が開校されたのは昭和十六年のことであつた。

かつての教師としての情熱が再び横浜の鶴見の地で、新しい学校として凝固し、ここに先生のいわゆる「第二の人生」の幕が開かれたのである。

その後の日本の歴史は戦争、敗戦、混乱、復興と目まぐるしい変化を経験するが、第一商業学校も、幾度か校名を変更しつつも、多くの人材を世に送り、本年、横浜商科大学高等学校として開校四十周年を迎えた。創立者として、教育者として、また経営者として、営々として積み重ねられた御努力が一つの時代を劃したわけである。

また、高校の発展とともに、先生の御活躍は広く私学問題全般にまで拡大されることになるのであるが、その業績はここでは割愛させていただく。

ただ、その間、逸することのできないものとして、先生の「第三の人生」の大事業とも

称すべき横浜商科短期大学の開設を挙げなくてはならない。

同短大は昭和四十一年、当時の横浜第一商業高等学校が横浜市旭区白根に移転した後の校地を利用して設立された。これは高度経済成長により高卒者の大学への進学が急増したという社会情勢に対応する措置でもあったが、何よりも高校、短大を通ずる一貫した理念により、広い視野と、深い教養をもつ「安んじて事を託さるる」実業人を養成したいという、先生の願望のあらわれに他ならない。同短大は三年後には発展的に解消し、新たに横浜商科大学が開学し、はじめ商学部商学科のみの単科大学として発足したが、昭和四十九年には商学科、貿易・観光学科、経営情報学科の三学科を設けた。港都横浜を地盤とする国際的実業人を育成したいという先生の夢は、ここに一応の完成をみたのである。

「疾風は勁草を知り、嚴霜は貞木を知る」（宋書）というが、先生は、短大開学以来、現在まで学長として疾風、嚴霜に耐られたのみならず、それらをはねかえして、さらに大きく豊かな稔りをもたらされた。

いま、大学は松本武雄学長の教育理念に共感する教職員の努力により着実に内容を充実しつつあり、北海道から沖縄にいたる日本全国から多くの学生を迎え入れ、すでに三千余

人の卒業生を送り出した。しかし、横浜市の緑区西八朔に購入したグラウンドは目下整備中であり、その地に新しい校舎を建築することも計画されている。まだまだ学長の手腕を俟たねば解決しえない問題が山積しているといわなくてはならない。

本紀要の執筆者はもとより、全学の教職員は、教学、経営の重責を担いつつ、教授としても自ら教壇に立たれて倦むことを知らない先生の、ますますの御健康と御活躍を心より念願する次第である。

昭和五十六年七月